

私は千葉県柏市で生活安全産業の一翼を担うべく、警備会社を展開する会社経営者です。ぜひ、新卒高校生の方々に当社の門をたたいて頂きたく、先生方、学校関係者の皆様に日頃から、経営者として思うこと、感じていることを綴ります。文化・芸能・教育・社会・経済・企業の問題と一緒に考えていきたいです。当紙の題名は私の人生訓であり、モットーでもあります。

教育現場でDXはすすむのか

2021年9月にデジタル庁が発足してから1年余が経過しました。直近の内閣改造でデジタル大臣に与党実力者が配され、「役所への申請書類にフロッピーディスクなどの個別記録媒体を指定する規定(いわゆるアナログ規制)」の見直しを打ち出してから官庁のDXへの対応力欠如が表面化しました。

かつて世界の先端技術を経済社会にいち早く実装し、その成果を小型化・高機能化、価格競争力に反映することで世界市場を席卷し、経済成長を謳歌してきたのが日本でした。日本の行政機構がレガシーシステムからの脱却を拒みつつきてきた結果、新型コロナ対応では新規感染者数の把握すらできない、目も当てられない惨状を世界にさらけ出したのです。

私達が失われた30年以前に「発展途上国」「後進国」と格下に見て来た中国・韓国・台湾勢やASEAN諸国の追い上げに窮し、経済成長率のみならずハイテク製品でも主導権を握られ、今や部品・部材・素材といったパーツ下請け企業が大半になってしまいました。まさに「買いたい・売りたい」の立場逆転です。

この原因は何なのでしょう。身の回りにあるハードの性能差ではありません。ソフトを操り、物事の最短ルートをイメージし、使用可能な情報をすばやく収集し、最適な解決方法にたどり着くスピード勝負に慣れていないのです。この勝負に勝てる人材を多く抱える国が次世代の勝者になります。

現在の教育現場にこの現実に対抗するだけの気力があるでしょうか？あらゆることが昭和からの受け売りのままではないでしょうか。江戸時代からの「読み・書き・そろばん」が明治・大正・昭和では日本の優位性に有効に働きました。平成・令和の世で「読み・書き・そろばん」に代わるものは「デジタル技術への順応度」でしょう。学校教育もこの時流に対応しなくてはなりません。



毎号、「マケテタマルカ」をご精読いただきありがとうございます。年明け以降も新卒生採用を継続します。今後とも当社をよろしくお願ひ申し上げます。

松本 隆一郎